

Title	支那政治組織の研究(及川恒忠撰, 啓成社刊行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.158(738)- 159(739)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は、強ち評者の私心とのみいはれようか。(宮島貞亮)

支那政治組織の研究 (及川恒忠撰 啓成社刊行)

多年に亘り、支那の法政經濟を研鑽され、絶えず此の方面の指導啓發に力められた慶應義塾法學部教授及川恒忠氏が、其の研究の成果ともいふべき「支那政治組織の研究」を近刊されたことは、學界のため寔に慶賀すべきことといはなければならぬ。殊に、かつて、教授の講筵に列し、懇篤なる指導に浴した吾々後進にとつて、洵に欣幸なことといはなければならぬ。

本書は一千頁を越ゆる大著であつて、序説ともいふべき地理概説に於て、先づ支那といふ名稱より説きおこし、支那の位置、面積、行政各省、支那の地質、支那民族の起原、人類學的分類、人口統計、地誌等に言及されてゐる。これによるも、教授が支那の歴史地理に如何に造詣深きか、吾々は窺知することが出来る。人口の條で、「假りに人口増加の趨勢が流行病、饑饉、水害、動亂といふが如き事情に拘束せられなかつたとしたならば、乾隆三十九年以後百三十五年の間に於て、二億二千萬より三億五千萬に達した人口は或は四億を超過することが出来たかも知れない。併し此等の原因が彼此相俟つて人口増加の趨勢を阻止したのであつて、恙うした特種の事情の儼存することは支那の人口を觀察する場合に雲煙過眼するを許さぬ所である」と教授は述べてをられるが、これは寔に至言といはなければならぬ。支那有數の大新聞「大公報」は最近、中國人口問題の題下に、動亂、洪水、饑饉等のた

め、一億の人口を失つた。人口問題は外交問題より刻下の重大問題であるといふ意味の記事を掲げてゐるが、強ち誇張した言とのみいはれまい。何となれば、近年の洪水は日本本土と等しき廣大な地域に亘つてゐるからである。兎に角假りに五千萬人失はれたとしても、國家の問題として、確かに重大な問題といはなければならぬ。余は教授の卓見に接し、益々此の感を深くせざるを得ない。

次の民國政治史篇に於ては、共和成立と袁世凱の時代、安徽派の消長時代、奉直二派の抗争、段執政政府、及び國民革命及び國民政府時代を詳述し、支那憲法史篇に於て、先づ日清戰爭の失敗と嗣いで起つた西歐各國による租借地の獲得とが支那の近代的覺醒を促したことを述べ、清末に於ける康有爲、梁啓超の變法自強策、張之洞、劉坤一の改革上奏、孫文の民主革命、或は戊戌政變乃至團匪事變、又は憲政考察大臣の海外派遣等紛々として捲き起つた革命前後の事象に就て論述され、また、民國國會史篇に於て、教授は専ら國會の變遷を述べ、支那憲政史の一斑を窺知するの用に資せられてゐる。

次の民國政黨史篇に於て、先づ資政院時代の政黨から國民黨改組前までの經過を述べ、次いで、第九章以下で國民黨の改組並に其後の狀況を明かにし、最後に中國共產黨にまで言及されてをり、民國政治組織篇に於ては、北京政府時代、國民政府時代の中央政府及び地方政治の機構を詳述されてゐる。また民國司法制度篇、民國陸軍篇、民國海軍篇、民國財政史篇等に言及されてゐるが、吾々は隨所に教授の卓見に接する。

要するに本書は教授の多年に亙る研究の成果ともいふべきものであり、緒言に於て、「もしも此の一書が支那の國情を研究しようとする時に、いくらかの手引草として役立つならば、撰者の貧しい努力は酬むられるわけである云々」と謙遜して述べてをられるが、支那に對し、正しい認識を持たんとするものにとつて、本書は必要缺くべからざるものである。また、本書に収録されてゐる多數の註及び卷末に附する地名辭典は支那を研究せんとするものに、如何程洪益を與ふるか圖り知ることが出來ぬ。(宮島貞亮)

賀茂傳説考

(肥後和男著)
東京文理科大学文科紀要第七卷

賀茂の神が、我國神祇史上に占める位置は、極めて大である。既に伴信友は、その「瀬見小河」に、賀茂傳説に對し精細な研究をなしてをるが、著者は、更に新見地、新材料から、この難解にして興味深き問題に新しき光明を投じてをる。先づ一、「資料」に於て釋日本紀卷九に引かれた風土記逸文を大體奈良朝の古文と認め、其他の資料の年代を検討し、二、「方法」に於て、歴史は一回限りの出來事であり、神話は、繰返しの世界即ち社會的生活に於て之に準據を與へんために成立したものであり、たゞ之を抽象的原則としてよりも具象的表現をとり、人間社會に於ける事實としての表現法を採用したもので、神話を説明するには繰返されしもの、即ち古代の民俗によらねばならずとし、今見る民俗より古代の民俗に遡り類推するのは、日本の如き生活に古今一貫した歴史の連続ある國に殊に可能であると論じ、賀茂の神話を解釋するに

賀茂に残れる幾多の慣習殊に神事の研究をもつてなすことを志してをる。著者の態度は、神話學上の儀禮説に屬せしむべきであり、フランス社會學派の傾向をとり、神話研究の正道を踏めるものである。續いて伴信友流に著者は、傳説を風土記記事を中心に逐條注釋的説明を加へ、三、「カモタケツヌミの觀念」に於て、その名の意義が畢竟猛く尊き神と云ふ程の意味であり、中に殆ど特殊な固有名詞的なものを含まずと云ひ、四、「八咫鳥」に於て、鳥が太陽崇拜と關係あると共に熊野信仰とも密接な交渉あり、我古代に於て二つの文化系統あり、この複雑性が記紀の叙述にも反映したるものとなし、五、「葛木鴨との關係」に於て山城賀茂と葛木鴨との神事傳説を比較し、共にカモ又はカモツミを最も古い基礎的な觀念とするものであり、たゞ葛城方面は社會の發達文化の進展ありしたため神々も特殊な神格を分離することになり、京都方面はなほ原始の状態を保存し、カモツミなる古き觀念をその儘に傳へることが出來たのであるとなし、六、「天神と地祇」に於ては、この根本を同じくすると考へらるゝ二つのカモの一方が天神に、他方が地祇に屬せしめられた原因をもつて統一の初期に於て葛城の勢力が大和朝廷に執拗な反抗をつゞけるため、その祖神が地祇に列つせられ、之に反し、京都の賀茂は、比較的容易に大和朝廷の天神信仰と同化し得たため天神の部類に入れられたのであらうとし、七、「神の遍歴譚」に於て葛木山に宿られた賀茂建角見命が山城岡田鴨に移り、それから賀茂川に來たと云ふ遍歴譚をもつて、賀茂の集團が移動したわけではなく、賀茂の人々が次第に自己に所縁あるものを外部に求めて行き、大和葛木のカモと結ばんがため